

令和 5 年 6 月 13 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00988

研究課題名(和文)日本ジャーナリスト会議(JCJ)の戦後ジャーナリズム史研究

研究課題名(英文) Postwar Journalism History Research of Japan Congress of Journalists

研究代表者

根津 朝彦(NEZU, TOMOHIKO)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：70710044

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：1955年に創設された日本ジャーナリスト会議(略称はJCJ)は、戦後ジャーナリズム史の中で影響力をもった職能団体である。初代議長は岩波書店の『世界』編集長の吉野源三郎が務めた。しかしこれまでJCJに対する学術的研究は、関係者の通史以外、存在しなかった。1955年から1970年代までのJCJの機関紙『ジャーナリスト』や関連文献を読み解くことで、日本ジャーナリスト会議の実態とそこに関わる人脈を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本ジャーナリスト会議で主要な役割を果たした人物は、朝鮮戦争下の報道界でレッドページにあった、ないしはレッドページの影響を被った記者・報道関係者であった。つまり報道界のレッドページが、JCJの主要な人脈を形成する大きな契機になったことを明らかにした学術的意義がある。また第2回JCJ賞を授賞した北海道新聞論説委員室を含めて戦後に活躍する多くのジャーナリストが関わるJCJのネットワークと、職能団体が果たした国際交流や市民社会との関わりを位置づけたことに社会的意義が存在する。

研究成果の概要(英文)：Founded in 1955, Japan Congress of Journalists (abbreviated as JCJ) is an influential professional organization in the history of postwar journalism. Its first chairman was Genzaburo Yoshino, editor-in-chief of Iwanami Shoten's Sekai. By reading the JCJ's journal "Journalist" and related literature from 1955 to the 1970s, this study revealed the reality of Japan Congress of Journalists and the personal connections involved.

研究分野：ジャーナリズム史

キーワード：日本ジャーナリスト会議 『ジャーナリスト』 職能団体 レッドページ 朝鮮戦争 東アジア 『北海道新聞』 小林金三

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究課題「日本ジャーナリスト会議 (J CJ) の戦後ジャーナリズム史研究」の学術的問いは、日本ジャーナリスト会議が戦後日本ジャーナリズム史に果たした役割とは何かというものである。J CJ は、1955 年に新聞・放送・出版などのジャーナリストが結集して集まった職能団体である。現在でも J CJ が授賞する日本ジャーナリスト会議賞 (J CJ 賞、1958 年創設) は、古くからあるジャーナリズム賞の中ではボーン・上田記念国際記者賞、日本新聞協会賞、日本記者クラブ賞とともに権威のある賞として知られる。しかし、J CJ の研究自体はもちろん、J CJ を戦後ジャーナリズム史の中で位置づけた研究も皆無である。

(2) 申請者が刊行した『戦後日本ジャーナリズムの思想』(東京大学出版会、2019 年)は、研究が少ない中で戦後日本ジャーナリズム史研究に先鞭をつけたものである。そこでは戦後に活躍した個々の記者たちにも着目したが、J CJ といった職能団体のネットワークまで分析できなかった。日本のジャーナリズムは、欧米で重視されてきた独立したジャーナリズム、権力監視の役割よりも、政府広報に傾斜しやすい企業ジャーナリズムを歴史的に形成してきた。従って日本のジャーナリズムの在り様を探るためには、日本の職能団体を代表してきた J CJ に迫ることが学術的背景として有効なのである。

2. 研究の目的

(1) 研究の目的は、1955 年の J CJ 創設から 1970 年代頃まで日本の数多くのジャーナリストが関わり、求心力をもった日本ジャーナリスト会議の実態を明らかにすることである。現在も J CJ は機関紙を刊行しており、団体としては存在しているが、実際には J CJ 賞の顕彰活動を主とする OB OG 組織となりつつある。かつてのように現役記者や、企業をこえた連携を支える職能団体としての機能は弱くなっている。初期は『世界』編集長の吉野源三郎ら広範な関係者が集まり、社会運動でも 1960 年の安保闘争を含めて存在感をもったが、一方で日本共産党の影響もあり、1966 年には中国派が脱退し、J CJ は分裂して混乱が生ずることになる。その中で、共闘関係にもあった日本新聞労働組合連合 (新聞労連とも略記) との関わりを意識しながら、J CJ の機関紙を中心に実相を分析する。

3. 研究の方法

(1) 通信社ライブラリーで計 4 回の資料調査を行い、その他にも関連文献や復刻した『新聞協会報』を購入し、地方紙を含めた各報道機関の社史や報道関係者の文献を多数収集して、読み込み、1950 年の報道界のレッドページにおいて主要紙、NHK、地方紙の動向 (『朝日新聞』編集局長の信夫韓一郎といった編集幹部の動静を含め) と、同時代の講和論争を押さえた。またレッドページによる解雇者の生き方は苦難を伴ったが、元 NHK の関係者に聞き取り調査を行った上で、一部、民放へ転身した者などをフォローした。

(2) 講和条約、1960 年安保闘争、ベトナム戦争の論説などを通じて異色の論説陣といわれた『北海道新聞』で中心的な役割を担った須田禎一と小林金三に関連する文献と『北海道新聞』社史関連の文献を収集した。特に小林金三の主著『ベトナム日記』(理論社、1965 年)、『木鶏の記ある新聞記者の回想』(北海道新聞社、1990 年)、『白塔 満洲国建国大学』(新人物往来社、2002 年)、『小ば金 冬青山房雑記』(新人物往来社、2005 年)、『論説委員室 60 年安保に賭けた日々』(彩流社、2005 年)を読み込み、『北海道新聞』の社史 (10 年史・20 年史・30 年史・40 年史・50 年史・60 年史・70 年史) の内容を精査して、分析を行った。

(3) 日本ジャーナリスト会議の本部機関紙『ジャーナリスト』を 1955 年の創刊号から丹念に読み、そこで掲げられた主張や方針、人的関係、国際交流などの具体諸相の分析を行った。

4. 研究成果

(1) 「小林金三と「満洲国」建国大学 『北海道新聞』論説陣を支えた東アジアの視座」で分析対象とした小林金三は、1960 年代のベトナム戦争や日韓基本条約に際しての『北海道新聞』論説陣の中心人物で、後に論説主幹を務めた。『北海道新聞』の論説が、東アジアの視座を色濃く有していたのは、小林金三の戦時中の「満洲国」建国大学の原体験と、そこで築いた他民族学友との人間関係が大きいことを明らかにした。1960 年代には日本社会で戦争責任をめぐって被害と加害の重層性の認識が深まるが、ジャーナリズムにおいて『北海道新聞』はその先駆的な役割を担っていたことを位置づけた。戦後日本ジャーナリズム史と日本ジャーナリスト会議において『北海道新聞』の果たした個性と役割は大きく、研究の発展性を開拓することができた。

(2) これまで報道界のレッドページと朝鮮戦争の相互関係は意外なことに研究が少なかったが、「レッドページと朝鮮戦争をめぐる報道界・記者研究の断章」では、同時代の朝鮮戦争期の報道

の特徴を明らかにすることで、報道界のレッドパージと朝鮮戦争の間に交差しづらい非対称性があったことを掘り下げた。レッドパージ後の反共主義的な報道界の姿勢が、**1950年10月**の新聞週間の社是に集約していく様も位置づけた。また朝鮮戦争下のレッドパージの内実は、大勢の人生を狂わせただけでなく、報道界の言論の自由を内部から空虚なものとする深刻な影響をジャーナリズムに及ぼした。報道界におけるレッドパージは、報道界だけにとどまらず、日本社会の同時代認識に深刻な影響を及ぼしたことを明らかにした。そしてレッドパージで追放された『朝日新聞』の畑中政春や共同通信の本田良介が、**1955年**に創立した日本ジャーナリスト会議（**JCJ**）に合流していく。つまり報道界のレッドパージと、日本ジャーナリスト会議に関わる人脈の形成過程は結びついていたのである。**JCJ**は、初代議長を務めた『世界』編集長の吉野源三郎をはじめ、新聞・通信社・放送局だけでなく出版社の存在感も大きかった。吉野は民主的な運営を粘り強く心がけたが、**1960年代**以降、日本共産党の影響が強くなり、吉野は退会をすることになる。第**2回 JCJ** 賞を受賞した北海道新聞委員論説室を含めて、戦後に活躍する多くのジャーナリストに関わる **JCJ** の影響力と人脈、その歴史を明らかにすることができた。

(3) 東アジアの視座に関連して、韓国ジャーナリズム史研究の成果である森類臣『韓国ジャーナリズムと言論民主化運動 『ハンギョレ新聞』をめぐる歴史社会学』(日本経済評論社、**2019年**)の書評を執筆し、他にも山本昭宏『戦後民主主義』(中公新書、**2021年**)の書評報告を行い、書評論文「個人主義をめぐる攻防と男たちの言論界」にまとめた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 根津朝彦	4. 巻 14
2. 論文標題 書評論文 森類臣著『韓国ジャーナリズムと言論民主化運動』 『ハンギョレ新聞』をめぐる歴史社会学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 同時代史研究	6. 最初と最後の頁 122-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根津朝彦	4. 巻 22
2. 論文標題 書評論文 個人主義をめぐる攻防と男たちの言論界 山本昭宏著『戦後民主主義 現代日本を創った思想と文化』	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 二十世紀研究	6. 最初と最後の頁 43-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 根津朝彦
2. 発表標題 コロナ下の今、改めて新聞（ジャーナリズム）の役割を問い直す
3. 学会等名 日本NIE学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 根津朝彦
2. 発表標題 コメント 川口悠子「故郷にとっての移民 占領期の広島と在米広島県人の貿易業者」
3. 学会等名 法政大学国際日本学研究所「新しい「国際日本学」を目指して」第9回公開研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 根津朝彦
2. 発表標題 書評報告 山本昭宏『戦後民主主義 現代日本を創った思想と文化』
3. 学会等名 京都大学現代史研究会2021年度大会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 根津朝彦
2. 発表標題 戦後ジャーナリズムの行方
3. 学会等名 ジャーナリズム研究関西の会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 根津朝彦
2. 発表標題 指定討論 シンポジウム コロナ下の今、「新聞」とどう向き合うか
3. 学会等名 日本NIE学会大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 根津朝彦
2. 発表標題 報道職への進路支援とジャーナリズム文化
3. 学会等名 日本メディア学会ジャーナリズム研究・教育部会「ジャーナリズム・リテラシー向上のためのティーチング・ティップス連続研究会 第3回 大学と報道職の近接」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 根津朝彦
2. 発表標題 日本でのジャーナリズム教育と報道事情
3. 学会等名 ジュアナ会と日本学術振興会ナイロビ研究連絡センターの共催
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 福間良明〔編〕（根津朝彦）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 250
3. 書名 言説・表象の磁場 シリーズ戦争と社会4	

1. 著者名 浪田陽子・福間良明〔編〕（根津朝彦）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 世界思想社	5. 総ページ数 278
3. 書名 はじめてのメディア研究 第2版 「基礎知識」から「テーマの見つけ方」まで	

1. 著者名 崔銀姫〔編〕（根津朝彦）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 480
3. 書名 東アジアと朝鮮戦争七〇年 メディア・思想・日本	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------